

喫茶去きつさこ

初対面の人に会うとき、ともすると人は、相手の勤めている会社や肩書き、収入、立場といったものを気にしてしまうものです。

これは仕方のない面もありますが、だからといって、要職にある人や、著名な人に対しては礼儀正しく接する一方、自分より目下の人などに対して、ぞんざいな態度を見せるのであれば問題です。

中国の唐の時代の高名な禅僧であった趙州じょうしゅうは、尋ねて来た人に対して、相手が身分の高い人であれ、低い人であれ、金持ちであれ、貧乏であれ、誰であっても分け隔てなく温かい持て成しの心でもってお茶を勧めたと言われます。

この逸話から生まれたのが『喫茶去きつさこ』という禅語であり、これは『まあ、お茶でも一服召し上がれ』 という意味です。

この禅語の精神は、日本においては古くから茶道に取り入れられました。昔、武士は茶室へ入るとき、刀を外に置かなければなりません。刀とは武士にとって権威の象徴です。それを持ち込まないと言う事は、茶室の中では、身分も地位も全て捨て去って、ただ一人の人間として主人と向き合うことを意味します。そうすることで、お茶の本当の美味しさを味わうことが出来ると考えられていたのです。また同時に、お客さんと主人との、深い心の交流が生まれるとも茶道では考えたのです。

誰に対しても、温かいお持て成しの心で接したいものです。肩書や地位で人を判断するのをやめれば、『心の通い合う相手』に出会えます。

温かい気持ちで、一緒にお茶を飲める人を、大事にしたい。